



発行
豊中市人権教育推進委員協議会
機関紙編集部
(豊中市教育委員会事務局社会教育課内)
電話 06-6858-2580



令和4年度(2022年度)人権作品募集入選作品より

巻頭言

人との出会い・ふれあいから人権を学ぶ

副会長 渡邊 美代子

この度の、石川県能登半島地震での被災に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

さて、人権とは、私たちが長い年月をかけて数多くの人との出会い・ふれあいから沢山の教訓を学ぶことにより、その尊さを知り得るものだと思います。

人権の尊さは、この先の大きく変化する世の中でも変わらないことでしょう。

私の場合 PTA 活動から始まり地域活動へと、幅広く人との繋がりが広がっていきました。私は十数年余り前から仲間とともに図書館で、子どもたちに伝えたいことや知ってほしいことを選び、小学校の子ども教室で絵本や紙芝居の読み聞かせをしてきました。私たちも練習をして臨みますし、またその都度、読み手さんとして学校の先生方にも登場してもらいます。

こちらが用意した以外にも先



生方が準備してくださったこともあります。子どもたちはキラキラした目で聞いてくれます。それから何年かが経ち、当時参加してくれていた子どもが大学生になり、自分の母校で同じように子どもたちに絵本や紙芝居の読み聞かせをしてくれた日のことは、今も忘れることは出来ません。私の校区では、校長先生による人権学習講座を開催しており、今回は「多文化共生と本校の課題」について学びました。自分らしく育つこと、自分の思いや意見を表明できることの大切さです。学びの場でお二人のお母さんに次回の読み聞かせのお誘いをしたところ快く引き受けて下さり、とても良い時間を過ごしました。

絵本や紙芝居を通じて得るものは、単なる知識ではありません。それは他者とふれあいながら培われる共感や思いやり、また異なった視点をお互いが理解し合うことも大事だと思います。人との出会いやふれあいが人権教育の基礎となる出発点です。

「人権教育をすすめる市民の集い」を終えて

意見発表…テーマ：南海トラフ巨大地震を地図で学ぶ

発表者：池田 晶一さん(日本地図学会 日本城郭史学会)

記念講演…テーマ：誰ひとり取り残されないまちづくり

～フル・インクルージョンをめざして～

講師：玉木 幸則さん

(一般社団法人兵庫県相談支援ネットワーク 代表理事)



■ 記念講演要旨

「誰ひとり置いてけぼりにならないようにしよな」の意味合いを講演テーマに込めた。変化に富み、多様性に満ちたバラエティーな社会では、分類次第でだれもがマイノリティになる。障害のある人に限らず、生きづらさを抱えるすべてのマイノリティのバリアをなくすため、皆で考えていく。障害者の当事者代表としてではなく、ひとりの人間としてここで話す。

幅広い人権課題事例とそれに対する見解を述べたのち、話題は自身のことへ。兵庫県立肢体不自由児療育施設への入所や、養護学校への通学・入寮などで、家族と13年しか暮らせていない。僕に障害があるのではなく、いわゆる健常者という人たちの意識の中にあるのだと思う。

1996年「優生保護法」廃止以降の現在も、優生思想が根強く在ると感じる。多額の資金を投入して、特別支援学校の新設が続いていることを危惧している。本来、校区の学校でともに学び生活することで、ともに生きていくことを学ぶものではないのか。「幸せ」は生まれる前・生まれた直後・障害の有無で決まるものでも、周囲が決めるものでもないはず。

まずは自分や家族・友だちをととても大切に思うことから、ともに生きるまちづくり＝フル・インクルージョンが始まる。

会計 林 久美子

■ 意見発表を聞いて

第九中学校校区は、新田小・西丘小・南丘小・新田南小の各校区から構成される広域な地域です。令和5年度は各学年9クラス、生徒数1,090名となっています。

それぞれの学校では、多くの教職員が連携するために、様々な取り組みを行っています。夏季休業中には小中連携研修として、4校の教職員が西丘小に集合し、「子ども理解にもとづく生徒指導」をテーマに講義と演習を行いました。二学期には「相互授業参観週間」を設け、小学校、中学校をそれぞれ行き来し、子どもたちの日常の授業を参観しあって学びました。また、12月の小中交流会ではたくさんの「中学校体験授業」を小中間で協力して準備し、中学進学時の不安を解消するとともに、わくわくした気持ちで入学できるように工夫しています。このように小中学校ともに一人ひとりの子どもの9年間を大切に日々の教育活動を行う体制で取り組んでいます。また地域全体の防災にも取り組んで行くべきと思っております。

この度の意見発表に当たり、同校区在住の歴史に造詣の深い池田晶一様をお願いし、防災をテーマに「南海ト

ラフ地震を地図で学ぶ」を発表していただきました。その中で、千里丘陵の断層の図が紹介され、豊中全域を見る限り「野畑・小野原・仏念寺山」各断層が蜘蛛の巣を張った上に我々が日々生活していることがわかりました。

また知るにつれて今年一月元旦に発生した能登半島地震の悲惨な光景を見ながら決して対岸の火事ではないことと痛感させられました。人間は天災には勝てないが、人災をゼロに近づけることは我々の使命と、日々の防災意識の向上に努めるべきと考えております。

九中校区常任委員 杉本 勉



豊中市人権協は今日まで「市民の人権感覚の育成と、人権が大切にされた市民社会の実現」をめざし、取り組んでまいりましたが、自主的市民団体として、今後、自らの財源確保も大事なことと考え、昨年度にひきつづき「人権教育をすすめる市民の集い」においてご参加の皆様には支援金をお願いいたしましたところ31,730円の支援金をお寄せいただきました。皆さまの貴重な支援金は今後の人権協の活動に活用させていただきます。ご協力ありがとうございました。

二中校区 盲導犬と生きる

二中校区常任委員 矢森 和枝

みなさんは知っているでしょうか。盲導犬を。盲導犬を迎え、ともに生活をしている視覚障害者の方々を。

みなさんは知っているでしょうか。1頭の盲導犬を育成するにあたり、どれだけの人の愛情と覚悟があることを。



今年度、二中校区では関西盲導犬協会訓練センターを訪問しました。

盲導犬に関するお話をお聞きした後、木香テラス（犬舎）や訓練のようすを見学させていただきました。木香テラスは木のぬくもりを感じ、大きなガラス窓から太陽の光がふりそそぐ、とても気持ちの良い場所です。訓練犬はここで生活をし、職員の方々はここで仕事をします。

多くの方が誤解しているようですが、盲導犬は信号機の色を識別しているのではなく、盲導犬を使っている方が周りから聴こえる音などで渡れるかどうかの判断をし、盲導犬に進むよう指示を出すそうです。とても学びの多い研修会でした。

十七中校区 京都太陽の家

十七中校区常任委員 加納 昌美

12月5日に社会福祉法人「京都太陽の家」を見学させていただきました。京都太陽の家は、No Charity, but a Chance!（保護より機会を!）をスローガンとしたオムロン



との共同出資施設で、障害を持つ方がオムロン製品（体温計、ソケット等）を製造しています。

施設（工場）内は、車椅子でもすれ違える幅広の廊下、障害を持った方でもミスなく作業できるように写真を使って明確化された作業手順表などさまざまな工夫がされていました。また工作室を設置して、障害に応じた補助器具を適宜作成できるようにしていました。そして画像認識の技術を導入するなどの工夫により製品の品質維持に努め、しっかりとした製品を製造できるようにしていました。

保護より機会を!～この言葉を実現するための工夫は素晴らしいものでした。

マイ ストーリーズ パネル展 “My Story”sと役員研修会

人権協は追体験型写真展 “My Story” s ～部落につながる「私」たちから見える景色～を開催しました。企画にあたっては、もともと人権協は1970年、豊中市の一市民による部落差別の身元調査依頼を契機に結成され、市民への人権教育をすすめるために活動してきた団体であること、そして現在も部落差別はなくなっておらず、豊中でも差別事象が続いている状況がありました。

そこで先ず役員会では、部落問題を今一度勉強しようと、展示パネルの制作プロデュースもされた内田龍史さん（関西大学社会学部教授、ブラックヘリテージ BURAKU HERITAGE メンバー）を招いて研修会を行いました。研修会では部落差別が今なお現存していることや、パネル作成の思いなどを学びました。結婚や土地購入時に表出する忌避意識、イン

ターネットでの差別情報の流出、部落のマイナスイメージ等々がある一方で、知らないとか関係ないと問題意識をもたない社会に対し、“部落問題”を「遠い昔の話」ではなく「今も存在している身近な問題」として感じてもらうために、部落につながる8人の方にスポットライトを当てた追体験型写真展として企画されていることを学びました。

これに合わせて、豊中水平社100周年パネルの一部も紹介しました。

副会長 植松 英子



追体験型写真展 ▶
“My Story” s (2/15～2/22)
～部落につながる「私」たちから見える景色～

「過去」に学び「未来」を創る



豊中市立第十四中学校長 石井 武

第十四中学校は1978年に創立し、現在45年目を迎えています。北緑丘という地名の通り豊中市の最北部に位置し、千里川のせせらぎとともに緑豊かな恵まれた環境にあります。しかし開校当時には一本の木も花も緑もなく、砂漠に2棟の校舎と体育館があるだけの学校環境からスタートしたそうです。自分たちの力で環境を整えようと、生徒、保護者、教職員そして地域のみなさんが力を合わせて年間数百本もの木々の植樹を行い、大切に守り育ててきた歴史があったからこそ、花と緑に囲まれた素晴らしい環境の中で今、子どもたちは学ぶことができます。

現在、私たちが取り組むべき教育課題は数多くありますが、本校においては第一に、人権課題が挙げられます。学習指導面や生徒指導面における

課題も山積していますが、すべての基盤となるのが人権教育であり、豊かな心の育みであると考えています。特に同和教育、部落問題学習については、まだ緒についたばかりであり、まずは私たち教職員の学びと意識を高めようと、校内外での人権研修等を積み重ねているところです。

十四中生は、仲間を思う気持ちやみんなで楽しみつなぐ力があり、地域諸団体は子どもたちを応援していただける強みがあるとともに、校区小学校との連携も進みつつあります。小中9年間での人権教育カリキュラムを策定し、地域と連帯しながら豊かな人権文化あふれる学校づくり、まちづくりを進め、未来創りにつなげていきたいと考えています。

役員・常任委員現地研修会

「ウトロ平和祈念館」を訪ねて

副会長 古川 博夫

聞くに堪えないヘイトスピーチを聞いたことがあります。しかもそのスピーチをしていたのが高校生か大学生にしか見えない女の子でした。



1月19日(金)、役員・常任委員の現地研修会が宇治市にある「ウトロ平和祈念館」で行われました。

戦前、京都飛行場建設労働者として集められ、戦後行き場がないためウトロの地に留まるしかなかった朝鮮の人々。水害に見舞われ、上下水道などのインフラも整備されない劣悪な環境の下で暮らさざるをえない状況でした。

土地の転売で不法占拠と判決が出て、幾多の曲折を

経て、この地の一部を購入し強制退去を脱し「ウトロ平和祈念館」の建設に向かっている最中、これも22歳の若い青年が展示予定だった資料や民家を放火。

青年のまちがった思い込みによる行動の恐ろしさを見る思いです。

正しい歴史が伝えられず、間違った情報、憎悪を膨らませていく。分断、差別、不寛容な世の中にはなりたくないものです。

「差別する人に問題があるのではなく、差別をする状況に問題がある。出会いがあって初めてお互いが理解できる。昔の歴史ではなくこれから未来の歴史をつくっていく。」と語

る副館長の金秀煥キム スファンさんの話が印象的でした。



編集後記

元旦に発災した能登半島地震により、被害に遭われた皆さまへ、心よりお見舞いを申し上げます。大規模災害は、多くの命と生活が突然奪われる、あるいは危険にさらされるという、理不尽な苦しみを強いるものです。こうした状況はまさに被災者の皆さんの人権を大きく損なうものです。私たちは一人ひとりが、被災された方々の状況を理解し、我がこととしてとらえ、息の長い支援を続けていくことが大切だと考えます。

最後になりましたが、「じんけん」166号発行にあたり、ご執筆、ご投稿いただきました皆さまに心よりお礼申し上げます。

監事 田上 磨智美